

中入

欄

今昔を問はず、何なりと興深き藝界の逸話、或は事に觸れ物に觸れての随時の御感想、御批判、或は本誌への御希望、御警告等々……御自由に御投稿願ひます。
(但し取捨は當係に御一任をお許し下さい)

▼前號の山本先生の「観劇の思ひ出」を拜見すると、御幼少の頃に喜多流の諸仕舞、さてはお能まで稽古されて、後にはお家元の邯鄲や望月の子方にまで出られたと何つて全く驚き入りました。能の子方をなされたといふ事は以前にもちよつと伺つたが、まさかに「斯程までとは存ぜず候」で、カッコを胸に着けてハッ撥を打つ俊敏な子方の姿を今の先生とどうにも結びつけて考へられませんか。英文學とお能、教授と師範、餘りにも遠い隔たりで、三題噺にもなりま

すまい。それにしても、もうそろそろそのいにしへをおぼし召して、一世一代のお覺悟で「自然居士」のカッコの舞など見せて頂きたいものです。つひ先日

林秀雄さんと朝日會館にお家元の「實盛」を拜見したので、一層先生のお話に深く感じたわけでございます。(天野梅徑)

▼喜多の家元六平太のロッベイタはルスン言葉か何かで巾着の事で、豊公の腰巾着といふ意味から洒落れてつけたのだといふ。能師に舶來語は恐ろしく先端を行つたものだ。(八十八)

▼十一月の大阪の芝居が氣になつて來た。決定してゐた六代目の來阪がハッキリ來ぬ事に決定して了つて六代目ファンには誠にお氣の毒の至りだが、誰が來るとか來ないかは別として延若をシンの芝居を是非どこかであけて欲しいものである。

此月の「錄三」「寺子屋」の二狂言は河内屋として決して上乘

の出來榮えを示すものではないのだから此意味から言つてももつと〳〵見て疲れる狂言を見せたい。疲れると言つても退屈して疲れるのではなく延若の藝に本當に見疲れを覺えるものを見せて貰ひ度い。自分の好みで延若に注文をさせて貰ふのなら「有職錄倉山」「金閣寺」「敵討襷襦袢」「橘彩色娘扇」などがある。何れも時局柄台本の方も大丈夫だらうし、上演價值も十二分にある。又道頓堀では珍らしい延若の「熊谷陣屋」も望んで置く。(鳴瀧藤四郎)

▼文樂座で發行する冊子型の番附の編輯が杜撰を極めてゐたことは四ツ橋開場以來指摘されてゐたところであつたが、最近漸くその内容が改良されつゝあることは喜ばしいことである。

例へば床本として掲載されてゐるものが、從來はあり合せの活字本に據つてゐた爲めか、實際に語られるものとひどく相異してゐた。その上誤植が多くて讀みの下らないところさへ尠くなかつたのであるが、十月興行のものは「鰻谷」について古靱師の校正を経た由で先年のものとは全く違つたものになつた。これでこそ後世古靱師の「鰻谷」に如何なる床本が採用されたかを理解するに役立つと云ふもので片々たるこの冊子の價值は誠に大きいわけである。丸本研究の行届いた古靱師は「堀川」や「沼津」のやうに原作還元の床本や「御所三」のやうに一般に流布される異本を排して最も整つた「筐の片袖」を採り上げることが等があるが、そうしたことがこの番附によつて明瞭にされるとしたらそれから受ける利益は一通りではない。酬はれる所甚だ妙い仕事であるが、編輯者中村雄氏の努力を多すると共に今後一層完璧を期せられんことを希望して已まない。

(大西重孝)